

ISSN 0919-0120

2010.1 No.70

目次

- ・特別展余間「市村威人と中馬、足助塩」……………2・3
- ・棒の手会館企画展
豊田市郷土資料館所蔵資料による「花鳥画展」……………4
- ・埋蔵文化財調査ニュース……………5
- ・豊田大塚古墳出土雲珠と胡録金具に伴う有機質の調査 ……6・7
- ・文化財シリーズ70・資料館NEWS……………8

豊田市
郷土資料館
だより

No.70

Toyota City Museum
Of
Local History



石仏(三十三観音 玉野町)



足助川沿い中馬街道



平成21年10月31日から12月6日まで豊田市郷土資料館において「塩の歴史と民俗－三河の塩生産と交易－」を開催しました。展示と図録のなかで、塩の流通の章において、伊那、三河の中馬制についてふれる機会を得ました。そのなかで、中馬に関する複数の報告書があり、内容も一部重複のあることを知りました。本稿では、余聞として、これらの文献をとりあげ、伊那、三河の中馬研究の経緯をたどってみようと思います。

中馬制の基礎的な研究として、昭和19年に発刊された古島敏雄の『信州中馬の研究－近世日本陸上運輸史の一齣－』（東京：伊藤書店）があげられます。この研究では従来、五街道を中心とした伝馬、助郷など幕府管理下の交通制度に視点をあてたものとは異なり、都市人口の増加、商品経済の発達、農村社会への商品流入、物資流通と官制交通との矛盾など社会経済史的な立場から中馬の発生、成り立ちを論じたものです。江戸時代初期、庶民と物資は、内陸から海岸、江戸、大坂、京などの都市に通じるには五街道によらねばならず、規制の厳しい宿駅を避け、安価な輸送手段として牛、馬の背による輸送が発生したとのべられています。そこに信州中馬の原点があり、江戸時代中期以後、特に信州伊那地方で発達した制度であることを文献史学の立場から系統的に明らかにしました。

昭和29年、文化財保護委員会（現文化庁）は「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗資料」の基準を設置し、5種目を選定しました。その一つに長野県伊那地方の中馬制が選択され、長野県教育委員会に調査が委託されました。

その選定された目的と調査の経緯を『伊那』337号（1956・伊那郷土史学会）巻末の下伊那誌編纂室・宮下操の記事から要約しておきましょう。中馬制は中、近世にかけて国内に物資の運輸に重要な役割を果たしたもので、ことに中部山岳地方における発達は、伊那街道を中心に活発に行われ、東海から甲信方面の山間へ物資を輸送するため高度に利用され、明治時代に入ってもまだ大きく残存し、それに従事した馬方も生存しているため、その方法および習俗その他を記録することを目的としていました。

調査は下伊那史編纂主任・市村咸人、下伊那歴史同好会代表・大沢和夫を中心に委ねられ、早速、昭和31

年1月に下伊那郡教育事務所で文化財保護委員会・田原久文部技官同席のもとで、記録の対象・内容・方法・場所・経費・担当者等の協議を経た準備会合がもたれました。

実際の調査は教育会編纂会等の協力を得て伊那街道の郡内関係各地はもとより、尾三両国にわたる山間地方から東海地方にかけて詳細に調査、輸送された物資のうちその最も主なものは塩である関係上、その生産地である碧南地方の大浜から半田市成岩等の海岸地域及びその重要な輸送経路として足助、武節、根羽、浪合等について前後3回の実地踏査が行われました。

調査を主宰した市村咸人（1878～1963）は下伊那郡の生まれで、明治から昭和の長野県を代表する地方史学者で、特に伊那地方地域史の調査と研究に専念し、その実証的研究はつとによく聞こえていました。尊王思想の研究から、美術、工芸、考古、民俗学におよび、伊那谷歴史研究の基礎を築いた研究者です。生涯にわたって蒐集された図書、筆写史料、撮影写真・乾板類、フィールドノート、原稿類は現在、社団法人・下伊那教育会（飯田市仲の町）に整然と整理、保存されています。

今回の特別展にあたり、下伊那教育会より市村、大沢、宮下の現地調査のフィールドノートをはじめとする関係資料を閲覧する機会を与您いただきました。その一部から現地調査の様子を知ることができます。市村主人一行が愛知県に調査に入ったのは昭和31年3月から5月の時期でした。その行程を以下に可能な限りたどってみます。

・ 3月26日

市村、大沢、宮下の3名で稲武町役場を訪ねる。大石文一町長、鈴木勝雄稲武中学校長より聞き書き。稲武の問屋つたやの主人、同問屋出身の尾形じょうさんから聞き書き。稲武和泉屋に宿泊。

・ 3月27日

小田木の馬宿おくで、連谷の馬宿はまの聞き取り。午後、予定変更し飯田に帰る。

・ 4月9日

平沢から旧飯田街道を下って中之御所より足助に入る。足助町役場訪問、大田績助役と面談、種々紹介を受ける。

塩問屋・蓑屋等塩問屋、馬宿の聞き取り。
蓑屋の帳簿から足助に入った塩の産地、入荷量を調べる。

西町の弘化の道標調査。三嶋屋に投宿。

・ 4月10日

足助で馬宿の聞き書き。

午後、平古土場の平専問屋・宇野、磯谷氏より現地案内を受け、聞き書き。

九久平の松島屋に宿泊。

・ 4月11日

朝、九久平をバスでたち、拳母、今池を經由し名古屋市高針の馬宿の聞き書き、「高針誌」の筆写。

バスで名古屋市内にいで、名鉄で知立にいで、乗換えて、新須磨で下車、碧南市役所訪問。大浜塩、棚尾の塩田や拳母、足助方面への出荷、川船について聞き取り、文献調査。碧南駅前の伊藤旅館に投宿。

・ 4月12日

朝、小型船で大浜から半田に渡り、半田市教育委員会を訪ねる。成岩、亀崎の塩田について聞き取り、成岩町史購入、地元史の文献調査。

午前、船で大浜に帰り、知立経由で岡崎に向かう。図書館で岡崎市史調査、筆写。

・ 4月30日

第二次調査として、市村、宮下の2名にてバスで飯田をたち、足助にくる。郷土史家・宇野錠太郎の尽力で蓑屋の通帳19冊の調査、筆写。山城屋旅館に投宿。

・ 5月1・2日

宇野氏より塩問屋について聞き取り。

以上の行程から3月26～27日、4月9日～12日、4月30～5月2日の3次にわたる調査がおこなわれました。5月末には早々成果が県教育委員会、文化財保護委員会に報告されたようです。その構成と内容は

- 第一部 中馬の歴史、補説
- 第二部 中馬の様相
- 第三部 中馬関係資料・文書目録
- 第四部 地図・実測図・写生図・写真

の四部構成となっています。

また、このような中馬調査に呼応したものであろうか、同年の『伊那』6月号は中馬特集号として発刊されました。調査に参加した宮下操の「伊那街道中馬余聞」と題した小田木、連谷で聞き書きした馬方の話の一部が紹介されています。

同年11月に、さきの県、国に報告された報告書の一

部に加筆がされ、市村咸人・大沢和夫共著のかたちで、下伊那歴史同好会より『伊那の中馬制』と題されて出版されました。

第一部 中馬制の発生と沿革

補説 足助塩とその奥地輸送

第二部 中馬の様相

上記のようにまとめられ、市村によって第一部の補説として「足助塩」が紹介されています。足助の蓑屋や平古の平専問屋の聞き書きからまとめられたものです。「足助塩」の字句の初出であろうかと考えられます。蓑屋の明治16年から23年の塩通帳の分析を基にした論考で、足助に入った塩の年毎の量とその生産地が明らかにされています。

その後昭和34年5月、長野県教育委員会より、文化財保護委員会に提出した報告書が一部再編され『中馬制の記録』（長野県民俗資料調査報告書1）として刊行されました。文末には澁沢敬三の跋文が寄せられています。

昭和52年3月、文化庁文化財保護部より無形の民俗文化財 記録・第22集『中馬の習俗』として本報告書が刊行されました。本報告書では中馬の一実例（秋山家の場合）が付されています。

以上、調査の経緯と報告書の発刊についてのべてきました。3種類の報告書が刊行されていますが中馬制の歴史、足助塩、中馬の様相についての内容は共通していますが図版の順序、付記などに若干の相違がありますが、いずれも中馬制、足助塩研究の基礎的な文献に位置づけられています。

本稿の調査、執筆にあたり下伊那教育会、同会・今牧久氏、豊田市史編さん室・中島学氏よりご教示をいただきました。ここに記してお礼申し上げます。文中において一部敬称を略させていただきました。

(松井孝宗)



『伊那の中馬制』

豊田市郷土資料館所蔵資料による「花鳥画展」

平成21年11月17日(火)～平成22年1月17日(日)

豊田市猿投町にある豊田市棒の手会館は県指定無形民俗文化財である棒の手の資料を展示・収蔵する資料館です。常設展示室では猿投神社に奉納される献馬を飾る馬飾りを中心に、警固の行列を再現した展示や熱気溢れる祭りの様子を紹介するスライドの他、各流派の奥技（型）を紹介したビデオを見ることができます。また特別展示室は年に2～3回さまざまな資料を展示する企画展を開催しています。

今回は、豊田市郷土資料館が所蔵する資料のうち「花鳥画」というテーマで資料を紹介します。是非この機会にご覧ください。

●「花鳥図十二月」石河有瓢画



三月「桜花小禽図」



八月「月下葡萄図」

石河有瓢は、明治3年に尾張藩士石河正基の三男として名古屋城三の丸の邸に生まれました。明治22年に日本青年絵画共進会に出品した後に画家として活躍、日本美術協会・全国絵画共進会はじめ文展にも入選した人物です。花鳥図は12幅あり1月から12月までそれぞれの季節にあわせた絵柄があります。郷土資料館では県内ゆかりの作家ということで所蔵しています。これまで茶室に飾り、紹介したことはありますが、12幅を一度に展示するのは初めてです。季節感のある花に小鳥やトンボ、蝶、かわせみ、鴨など一幅、一幅、趣の違う図柄を楽しみながらご鑑賞ください。

●「花鳥の図」中林竹洞画

中林竹洞は江戸時代後期名古屋に生まれた画家で南宋画を学び山本梅逸と共に京に上って研鑽を積んだといわれています。

展示作品は水辺の草花を描き前景の水面に1対の鴨が泳ぐ情景を描いています。岩の色鮮やかな群青色が画面のコントラストとなり、はなやかさを添えています。全体として穏やかな筆使いの一幅です。



●「花鳥の図十二月月屏風」山本梅逸画

山本梅逸は江戸時代後期の画家で、名古屋の彫刻を業とする家に生まれ尾張藩の御用絵師であった人物です。中林竹洞と共に京で苦学したといわれています。

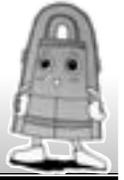
展示作品は、もともと掛軸として描かれた作品を屏風に仕立てたと考えられ、1枚1枚に繊細な花鳥画の世界が表現されています。淡い色合いの作品が多く上品で柔らかな筆使いで12枚の画面の中に四季おりおりの自然をたくみに表現しています。石河有瓢の花鳥画と比較して鑑賞していただくことと作者の筆使いや作風を感じていただくことができることでしょう。

郷土資料館は江戸時代、明治時代など古い時代の郷土ゆかりの作家の作品も収集対象としています。市内ゆかりの作家はもちろんですが、名古屋の画家は、挙母藩の画家にも影響を与えたと考えられること、当時、文化の中心は名古屋城下であったことなどから、その作品も所蔵しています。

豊田市郷土資料館所蔵資料による「花鳥画展」は豊田市棒の手会館（豊田市猿投町別所 23 番地 1）にて平成 22 年 1 月 17 日(日)まで開催しています。9 時～ 17 時まで / 入場無料 / 月曜休館 / 12 月 28 日～ 1 月 4 日休館



埋蔵文化財調査ニュース



勸学院文護寺跡・寺部遺跡〔寺部町2丁目〕

個人住宅の建替えに伴う調査を実施しました。調査対象となった区域は古代寺院の勸学院文護寺跡と縄文時代から古代の集落遺跡及び江戸時代の町屋跡が重なっているところです。調査対象となる区域は150㎡ほどありましたが、東部の区画は既設建物の基礎工事や庭の造成などにより遺構が残っていませんでした。そのため、残存状態の良かった西部の区画約58㎡を発掘調査しました。調査は狭い範囲でしたが、竪穴建物跡と溝が見つかりました。竪穴建物跡は2.8×2.6mの奈良時代の小さな建物跡です。東側には竈^{かまど}があり、竈付



〔竪穴建物内の遺物出土状況〕

近からは須恵器や瓦が出土しました。この瓦の中には軒丸瓦・軒平瓦が1点ずつみられます。また、この建物跡の南には溝遺構があり、この辺りでも瓦がまとまって出土し、寺院と関連した遺構の可能性がります。これまでこの遺跡では平瓦・丸瓦が出土していましたが、軒丸瓦・軒平瓦は今回の調査で初めて出土し、貴重な資料となりました。



〔溝遺構付近から出土した瓦〕

寺部遺跡（範囲確認調査）〔上野町1丁目・9丁目〕

寺部土地区画整理に関連した事業に先立ち、遺跡の範囲確認調査を行いました。寺部遺跡は平成20～21年に区画整理事業に伴って約9,000㎡を調査し、縄文時代のドングリを貯蔵した穴や平安時代の堤・ため池などの遺構が見つっています。今回の調査区は08～09年の調査区に隣接した約36,000㎡の区画で、縄文時代や平安時代の遺構が見つかる可能性がありました。この調査では対象地に26箇所のトレンチ（確認のための細長い坑）を設定して掘削しました。その結果、7箇所のトレンチで溝などの遺構が見つかり、須恵器や灰釉陶器などの遺物が出土しました。



〔寺部遺跡の調査状況〕

この他、上半期には向山古墓（本徳町・道路建設）、駒場瓦窯跡（駒場町・住宅建設）、臼木ヶ峰城跡（足助町・事業用建造物）、伊保遺跡（保見町・住宅建設）、鳳面館跡（千足町・住宅建設）などの範囲確認調査を行いました。

（杉浦 裕幸）

豊田大塚古墳出土雲珠と 胡籙金具に伴う有機質の調査

1.はじめに

遺跡より出土する金属器は、それぞれ鉄などの金属を加工して構成された遺物として、現在私達の目に触れることが多いと思います。これは、錆化した状態で安定し、金属が比較的残りやすいためです。一方で革や木といった有機質は腐朽し残りにくいものです。しかし、金属製品に伴う有機質は金属から出る錆に置換されることでその痕跡を残すケースが多く、近年の金属器研究の中でもこの有機質が重要視されるようになってきました。

特に雲珠・辻金具は革帯の交点に用いられる金具ですし、胡籙金具は有機質で構成された胡籙本体に銚を用いて連結されるものです。それぞれ、有機質なしで構成されるものではないのです。そのため、これらの資料を考える中で有機質の細部を調査することが求められます(注1)。今回、豊田大塚古墳の雲珠・胡籙金具に残る有機質を観察させていただく機会を与えていただきましたので、その観察結果について簡単ではありますが検討していきたいと思ひます。

2.調査の方法

調査は目視で行い、補完的にパソコン接続型ポータブルデジタルマイクロスコープ(ANMO Electronics社製、Dino Lite Pro Porolizer、写真1)を使用しました。この機器は、USB接続で起動し、観察した箇所を直接パソコンに画像として取り込み・保存することができます。また、観察物の計測を行うことも可能で



写真1 デジタルマイクロスコープの大きさ(右:一円玉)

す。従来の顕微鏡に比べて精度は落ちますが、持ち運びが簡便であるためモバイルノートパソコンと併せて実地の調査で使用できるという特徴があります。

3.雲珠に伴う有機質の観察

鉄地金銅装半球状無脚雲珠と呼ばれるものです。表面の金銅板にはタガネによって1mm程度の列点が刻まれています。文様の構成を解明するには至りませんでした。この雲珠の裏面に、雲珠に銚留された有機質の痕跡を確認しました(写真2)。この有機質は直線的に伸びる繊維の束が重なったもので、獣毛であると考えます。

獣毛は雲珠の外縁部から中心に向かって伸びる状況で確認されます。観察できたのは獣毛のみで革自体を確認するには至っていません。そのため、獣毛が雲珠の中に詰められたものとも考えられますが、革から剥がされた状態の獣毛のみが雲珠の中に入れていたとすれば、獣毛が外縁から中央に向かって整然と並ぶことに疑問を覚えます。そのため、帯状の毛皮を使用していた可能性が高いと考えられます。類似資料としては、鳥根県めんぐる古墳出土雲珠(注2)などが挙げられます。

雲珠に使用される革帯には、革のみのもの、布と一部に革を使用するもの(注3)、革の側端部を組紐様の布で縁取りしたもの(注4)、毛皮のものなどが存在することがわかりました。これまで、馬に馬具を装着した姿である馬装の復元が行われていますが(注5)、

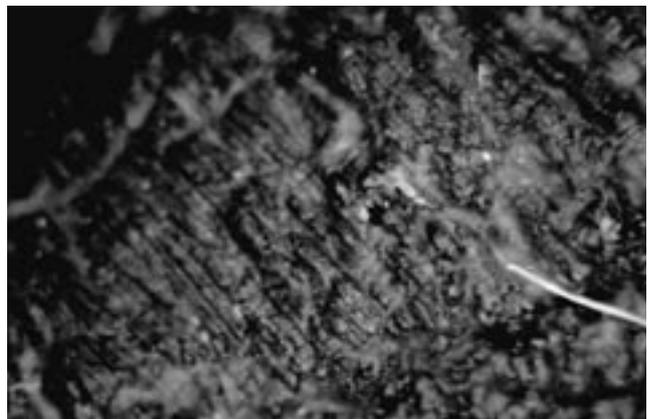


写真2 雲珠裏面に付着する獣毛痕跡

これらの類型や皮革と毛皮（注6）の使い分けの意味を考えていく必要があります。

4. 胡籙金具に伴う有機質の観察

胡籙金具は、矢を入れる道具である胡籙の表面に鋳留される金具です。鉄地金銅装で、タガネによって毛彫りの波状列点文が刻まれています。

通常、胡籙本体は有機質でつくられたものであるため、胡籙本体の腐朽することにより6世紀代の胡籙の具体的構造を検討し得る資料が少ない状況です。そのため、胡籙本体構造の解明には、胡籙金具の組み合わせ方のみでなく、裏面に付着する有機質の詳細な調査を行うことが求められます。

豊田大塚古墳の胡籙金具に付着する有機質は、いずれも布痕跡のみでした（写真3）。同時期の資料において遺存状況の良好な例を参照すれば（注7）、外側より金具→布→革の順で遺存するものが多く、革には漆が塗られていたものも確認されます。特に金具の縁には繊維による縁取りが見られ、金具をより際立たせる構造のものがほとんどです。同一資料群であっても、一部の金具にのみ獣毛が付着するものがあり、馬具同様に皮革と毛皮の使い分けがあった可能性を指摘することができます。豊田大塚古墳出土の胡籙で確認された有機質は布痕跡のみでしたが、その布痕跡も布状の凹みを確認できるのみでありましたので、元来は他の資料同様の有機質で構成された胡籙本体に、金具を鋳留した製品であったと考えられます。

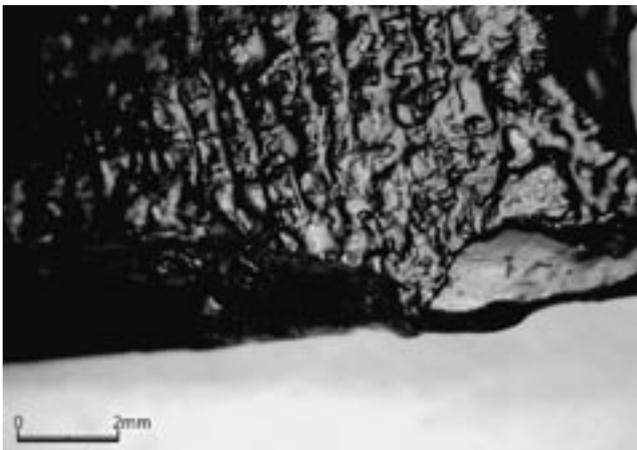


写真3 胡籙金具裏面に付着する布痕跡

5. おわりに

馬具と胡籙金具には、金銅装・タガネ彫りを施す点、類似する有機質を使用する点など多くの共通点を挙げることができます。これは、両製品がきわめて近い存在であったことを裏付けるものと考えます。特に、大阪府峯ヶ塚古墳の鞍（注8）や鳥根県上塩冶築山古墳の辻金具（注9）の馬具には胡籙と同様の繊維による縁取りが見られ、胡籙の意匠を採用した馬具が存在したと考えられます。豊田大塚古墳の馬具・胡籙でも古墳時代金属製品製作工人の交流の一端を示している可能性があります。今後詳細に観察を継続し、より具体的な馬具・武具の構造について検討を行っていきたいと思います。

今回の資料見学および執筆に当たりまして、豊田市郷土資料館 高橋健太郎氏に御協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

（京都府立大学大学院 初村武寛）

- （注1）千賀 久 2004「古墳時代の革製品」『皮革科学』第50巻第3号ほか
- （注2）鳥根県古代文化センター・鳥根県埋蔵文化財センター 2009『めんぐろ古墳の研究』鳥根県古代文化センター調査研究報告書 42
- （注3）霞ヶ浦町教育委員会・日本大学考古学会 2000『風返稲荷山古墳』
- （注4）羽曳野市教育委員会 2002『峯ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書』羽曳野市埋蔵文化財調査報告書第48号
- （注5）宮代栄一 2004「秘められた黄金の世紀 - 古墳時代の馬装」『百済武寧王と倭の王たち秘められた黄金の世紀展』ほか
- （注6）ここでは便宜上、獣毛の残る革を毛皮、獣毛を剥いだ状態の革を皮革とした。
- （注7）杉本和江・川本耕三・福山博章・初村武寛 2009「普通寺市王墓山古墳出土胡ろく金具の科学的調査」『日本文化財科学会第26回大会研究発表要旨集』ほか
- （注8）注4に同じ
- （注9）鳥根県古代文化センター 1999『上塩冶築山古墳の研究』鳥根県古代文化センター調査研究報告書 4

文化財シリーズ



市指定文化財
久木の木偶 付馬道具

久木町では足助八幡宮の例大祭である足助祭りの献馬で、飾馬に木偶（源三位頼政）を乗せ幾度となく奉納した歴史があります。足助八幡宮に献馬したところは多く「標具（ダシ）」と呼ばれる「八幡宮」の額を掲げるのが一般的で、木偶を乗せるのは久木町と野林町だけです。両町の木偶は平成13年2月6日に足助町の有形民俗文化財に指定されました。

久木の木偶は、木偶・馬具ともに製作年代は不詳です。衣裳は昭和30年頃に製作された3代目で、2代目の衣裳と初代の衣裳一部が残されていて、久木自治会で大切に保存されています。しかし、近年では傷みが激しいため市文化財保存事業費補助金を受け、頭・胴体・衣裳・小道具の修理を実施し、この

たび完了しました。10月4日(日)には、修理完了を記念した行事を久木町内で行い、皆さんに披露し修理完了を祝いました。

また、10月11日(日)の足助祭り本楽祭では、足助八幡宮へ奉納し、当時の姿を再現しました。



造形馬に乗せた久木の木偶（記念行事にて）

資料館 NEWS

「^{そまじ}杣路峠を踏破しました!」

11月7日(出)秋晴れの空の下、豊田市民約50名の皆様と一緒に、中馬街道（塩の道）の難所のひとつである、杣路峠越えに挑戦してきました。

明治27年に豊田市野入町から大野瀬町を経て長野県根羽村に至る道路（約10km）が改修されるまでは、人や馬は、野入から杣路峠を越えて根羽（約4km）へ、さらに飯田・塩尻を目指したそうです。塩の道にある幾多の難所の中でもこの杣路峠は山賊が出没し、海の幸や山の幸を運ぶ中馬隊を苦しめたと聞きます。現代は急峻な山道に加えて、熊の出没が不安のひとつです。



熊よけの鈴を腰にぶら下げながら、恐る恐る山に足を踏み入れると、一人分の幅しかない道が杉林の奥に続いているのが見えます。まさに荷車



も通ることのできない、人馬が一列で歩いた古道が目の前にありました。しかし、50名もの仲間での峠越えです。つづら折りの山道を歩く人の列が繋がって、歩く足取りも勇気づけられました。

峠直前の^{ゆきよし}伊良神社で休憩したあと、いよいよ標高830mの杣路峠へ。登り口の野入は標高600mなので標高差230mを登ることになります。杉林の間、さわやかな秋の風の向こうに、遠く三河の山々が折り重なるように見え、登り切った達成感とともに、塩の生まれ故郷である三河湾に想いを馳せました。



利用案内

開館時間 9:00~17:00
休館日 毎週月曜日（祝祭日は開館）
入場料 無料（特別展開催中は有料）
交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分
名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分
愛知環状鉄道「新豊田駅」より 徒歩15分
駐車場 約20台

■豊田市郷土資料館だより No.70 ■

平成22年1月12日発行
編集・発行 豊田市郷土資料館
〒471-0079 豊田市陣中町1-21
☎ (0565) 32-6561 FAX (0565) 34-0095
E-mail: rekihaku@city.toyota.aichi.jp
URL: <http://www.toyota-rekihaku.com>
※豊田市郷土資料館だよりはHPでもご覧になれます。